

## 事例2

# 資質・能力ベースの教育目標に基づき、 教科・科目を超えて生徒の成長を支える 山梨県立吉田高校

2017年度、資質・能力ベースの学校教育目標を策定し、あらゆる教育活動を改善してきた山梨県立吉田高校。その過程で形成された教師間の共通認識を土台に、教科・科目の枠を超えて議論し、生徒のさらなる成長を支える教育課程を編成した。

■ ■ ■ 教育目標を生徒・保護者とも共有し、その達成を目指す

2017年度、山梨県立吉田高校は、これからの時代を生き抜くために必要な資質・能力を検討し、高校3年間を通して8つの資質・能力を身につけることを目標とする「吉田高校グラデュエーション・ポリシー（吉高GP）」を策定した（図1）。そして、その達成に向け、年2回行う研究授業を通じて授業改善を図ったり、学校行事を効果検証に基づいて精選したりと、あらゆる教育活動の質向上を

推進してきた。廣瀬志保<sup>ひろせ</sup>教頭は、次のように説明する。

「まず、吉高GPに基づき、現行の教育課程で生徒の資質・能力を確実に伸ばす教育活動を整えてから、その延長線上で新教育課程を編成するというビジョンを持って取り組んできました。学校行事を始めとする教育活動の精選には多くの検討を要しましたが、そうした中で本校が目指すべき方向が明確化されていきました」  
そのような学校改革のプロセスを通じて教師の姿勢が大きく変わったと、古屋勇人<sup>ふるやゆうじん</sup>校長は述べる。

図1 「吉田高校グラデュエーション・ポリシー（吉高GP）」

- |   |       |                              |
|---|-------|------------------------------|
| 1 | 自己肯定力 | 短所も含めて、自分を認める力を身につけます        |
| 2 | 傾聴力   | 他者の意見を謙虚に聴く習慣を身につけます         |
| 3 | 分析力   | 事実を客観的に分析する習慣を身につけます         |
| 4 | 思考力   | 物事を鵜呑みにせず、「何故か」を考える習慣を身につけます |
| 5 | 発信力   | 自分の考えを、わかりやすく他者に伝える方法を身につけます |
| 6 | 想像力   | 未来（結果）を考え、想像する力を身につけます       |
| 7 | 創造力   | 課題を解決する方法を創造する力を身につけます       |
| 8 | 行動力   | 自身の考えに基づき、行動する力を身につけます       |

※学校資料を基に編集部で作成。



校長  
**古屋 勇人** ふるや・はやと  
教職歴36年。同校に赴任して1年目。



教頭  
**廣瀬 志保** ひろせ・しほ  
教職歴29年。同校に赴任して3年目。



教頭  
**谷内 路久** やない・みちひさ  
教職歴33年。同校に赴任して1年目。



教務主任  
**東 一孝** あずま・かずたか  
教職歴29年。同校に赴任して19年目。英語科。



「総合的な探究の時間」担当  
**木下 花子** きのした・はなこ  
教職歴19年。同校に赴任して5年目。国語科。



理数科担任  
**有野 将太** ありの・しょうた  
教職歴7年。同校に赴任して3年目。数学科。

#### 学校概要

**設立** 1937(昭和12)年  
**形態** 全日制/普通科・理数科/共学  
**生徒数** 1学年約240人  
**2021年度入試合格実績(現役のみ)** 国公立大は、東北大、筑波大、お茶の水女子大、東京大、山梨大、京都市大、大阪大などに97人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大、同志社大などに延べ573人が合格。

「教師一人ひとりが、担当教科・科目や学年、分掌など、自身の役割や立場と吉高GPの視点から、教育内容が生徒の成長に結びついているかを自然と考えるようになっていきました。3年間で育成を目指す資質・能力を俯瞰して捉えているからこそ、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で臨時休業となり、授業時数が減った際にも、冷静に先を見通し、授業内容を調整するなどの対応ができたのだと思います」

生徒や保護者はもちろん、同校を志望する中学生とその保護者にも、吉高GPを説明する。吉高GPによって、生徒は目的意識を持つて生き生きと学ぶため、卒業後の進路面も、地域の期待に十分に応える実績を上げ続けている。

■ ■ ■  
**全校で生徒を育む視点で、教科・科目の枠を超えて議論**

新教育課程編成の検討においても、吉高GPはその土台となった。20年5月、教務主任をリーダーとし、各教科主任などで構成される「カリキュラム・マネジメント委員会(以下、CM委員会)」で、初めて新教育課程の議論が行われた。同委員会は、吉高GPの策定時に立ち上げられた組織だ。まず、古屋校長が自校の教育方針や教育

目標を改めて説明し、それらを検討の土台とするよう指示。それを受けて各教科主任が教科会議で話し合い、同年10月に、各教科の新教育課程への要望をCM委員会に取りまとめた。

「1学年の総単位数は最大42単位数まで膨らみましたが、各教科・科目には現在の教育課程の単位数を維持したいという思いが当然ありますから、想定内の結果でした。『ここからは、教科・科目の枠を超えて、全校で生徒の成長を支える視点で議論を深めていこう』と呼びかけました」(古屋校長)

検討する上で重視したのは、3年間の学びを通じた生徒の成長と

いう縦軸と、教科連携による学びの相乗効果という横軸を、教師一人ひとりが持つことだった。教務主任の東一孝先生は次のように説明する。

「吉高GPによって、教育課程編成の方針の共通理解は既に図れていたため、すぐに建設的な議論に移れました。新教育課程は新しい考え方が求められるものではなく、従来の教育の延長線上にあると捉えています。現行の教育課程で吉高GPの達成にかなり迫っていると、多くの教師が手応えを感じており、現行の教育課程のよさをできる限り生かすことを意識して話し合いました」

東先生は、各教科主任と相談し、教科の状況を聞いた上でCM委員会での検討内容を説明。教科会議とCM委員会のそれぞれの議論を行き来し、単位数を調整した。そして、20年12月、CM委員会が新教育課程の仮案を作成(P.12図2)。それを基に、さらに議論と調整を重ね、21年3月に最終版を完成させて、山梨県教育委員会に提出する予定だ。

※プロフィールは、2021年3月時点のものです。

図2 山梨県立吉田高校 2022年度入学者 教育課程 検討案

教科	科目	標準 単位 数	1年		2年				3年				
			普通科	理数科	普通科		理数科		普通科		理数科		
					文系	理系	文系	理系	文系	理系	文系	理系	
国語	現代の国語	2	2	2									
	言語文化	2	2	2									
	論理国語	4			3	2		2	2	2		2	
	文学国語	4			3	3		2	3	3		3	
	国語表現	4							2				
	古典探究	4							2				
	*古典講読												
	*国語研究								2			2	
地理 歴史	地理総合	2	2					2					
	地理探究	3											
	歴史総合	2	2	2									
	日本史探究	3			3			2		2		4	
	世界史探究	3			3			2		2		4	
	*学校設定日本史									2			
	*学校設定世界史									2			
	*日本史研究									2			
	*世界史研究									2			
	公民	公共	2	2	2								
倫理		2								3	3	3	3
政治・経済		2			2	2	2	2			1	1	1
数学	数学Ⅰ	3	3										
	数学Ⅱ	4	1		3	4							
	数学Ⅲ	3								3			
	数学A	2	2										
	数学B	2			2	2							
	数学C	2			1	1				1			
	*総合数学α								3				
	*総合数学β								2				
	*総合数学γ									3			
	理科	物理基礎	2				2						
物理		4				3					4		
化学基礎		2	2										
化学		4				3					4		
生物基礎		2			3	2							
生物		4				3					4		
地学基礎		2	2										
地学		4											
科学と人間生活		2											
*理科特論										4			
保健 体育	体育	7~8	3	3	2	2	2	2	3	3	3	3	
	保健	2	1	1	1	1	1	1					
	*体育実践								3				
芸術	音楽Ⅰ	2	2	2									
	音楽Ⅱ	2				1							
	音楽Ⅲ	2											
	美術Ⅰ	2	2	2									
	美術Ⅱ	2				1							
	美術Ⅲ	2											
	書道Ⅰ	2	2	2									
	書道Ⅱ	2				1							
	書道Ⅲ	2											
	*芸術探究									3			
	素描									2			
	ソルフェージュ									2			
	*応用書道									2			
外国語	英語コミュニケーションⅠ	3	3	3									
	英語コミュニケーションⅡ	4				5	4	4					
	英語コミュニケーションⅢ	4							4	4		4	
	論理・表現Ⅰ	2	2	2									
	論理・表現Ⅱ	2				2	2	2					
	論理・表現Ⅲ	2							3	3		3	
	*英語特論								2				
家庭	家庭基礎	2				2	2	2					
	家庭総合	4											
	生活デザイン	4											
	フードデザイン									2			
	*ライフサポート									2			
情報	情報Ⅰ	2	2					2					
	情報Ⅱ	2											
理数	理数数学Ⅰ	6		4								4	7
	理数数学Ⅱ	8		2									2
	理数数学特論	6											2
	理数物理	6		3								3	3
	理数化学	6		2			1	3					3
	理数生物	6		3				3					3
	理数地学	6											3
	★理数探究	2		★1					★1				
	*理数理科特論												3
校外学修 特活	*ボランティア活動		(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)
	ホームルーム活動		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
総合的な探究の時間		3~6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
合計単位数			35	36	35	35	36	36	35	35	35	35	35

注1)「\*」は学校設定科目。 注2)「★」は長期休業中などに実施する科目。 注3) ( )は生徒からの申告により認定される単位。 ※学校資料を基に編集部で作成。

探究学習を軸に、各教科・科目が連携する学びを目指す  
 同校の新教育課程の特徴や議論

のポイントを見ていく。  
 特徴は、現行の教育課程の方針を継承しつつ、探究学習を軸に各教科・科目の連携を進展させた点

だ。富士山を間近に望む同校は、02年度から「総合的な学習(探究)の時間」で、富士山や富士吉田市を題材とした探究学習「富士山学」

を実施している。生徒は、「自然・環境」「歴史・文化」などの5分野から1つを選んで探究を深めるが、いずれの分野でも富士山の

地形や地質の知識が必要となるため、新教育課程では普通科の1年次に「地学基礎」を配置した上で、理科の他科目の配置を検討した。

「情報Ⅰ」は、大学入学共通テストでの出題が検討されている点を踏まえ、2・3年次での配置も考えた。しかし、「情報Ⅰ」は、数学や地理、さらには探究学習と連携させた学びができると考え、普通科では1年次に配置した。

同校は、ビッグデータを提供する「地域経済分析システム（RE S A S）」（\*1）を活用して学習を行う「RE S A S de 地域探究実践校」であり、20年12月、内閣府主催の成果発表会で、生徒はRE S A Sを活用した探究学習の成果を発表した。「情報Ⅰ」は他の学びと関連づけて発展させたいと、「総合的な探究の時間」担当の木下花子先生は語る。

「生徒がデータを活用する様子を見て、データサイエンスは全生徒に必須の素養だと感じました。『数学Ⅰ』や『情報Ⅰ』で得た知識とRE S A Sの活用を、『富士山学』で連携させ、横断的な学び

に発展させていく計画です」

理科では、1・2年次に各1単位の「理数探究」を配置した。生徒各自の関心に基づいて数学や理科に関する研究テーマを設定し、地元企業や研究所、大学と協働して探究を進め、大学での学びにつながるようにする。理数科担任の有野将太先生はこう話す。

「現行の教育課程では、『課題研究』で、数学や理科の枠を超えた横断的な探究を行っています。『理数探究』では、地域の連携先をさらに充実させ、探究を深めていく予定です」

### ■ ■ ■ 単位数の減少を 教科・科目間で連携して補完

科目構成が大きく変わる国語でも、様々な検討がなされた。現行の教育課程で「国語総合」を1年次に5単位としていることから、当初、「現代の国語」2単位、「言語文化」3単位を考えた。しかし、他教科・科目の単位数を考慮して再検討し、最終的に「言語文化」を2単位とした。

「その分、例えば、手紙の書き方は、『富士山学』で関係者への礼状を書く際に指導するなど、他教科・科目と連携して補完する計画です。本校では、学年主任や教務主任が中心となつて有機的に教育活動が行われており、他学年・教科に相談しやすいという強みがあります」（木下先生）

数学では、「数学C」の扱いが論点となり、現時点では、普通科文系は2年次に1単位、理系は2・3年次に各1単位の配当とした。

### ■ ■ ■ 新教育課程に応じた 学習評価の仕組みづくりに着手

新教育課程の完成後は、学習評価の検討に移行する予定だ。観点別学習状況の評価の実施に向けて、吉高GPの8つの力を、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点到し落し込む。

多面的評価の拡充も図る。20年度に受験したベネッセの「GPS-Academic」（\*2）の結果によって、教師が経験則で捉えていた生

徒の成長が可視化された。そこで、21年度から同アセスメントを本格的に導入することにしたと、谷内路久教頭は語る。

「これまで吉高GPの到達度は、自己評価を基に測っていました。指導と評価の一体化を一層推進するためにも、『GPS-Academic』などの客観的指標でも効果検証を行う必要があるでしょう。また、評価方法を多様化することで、生徒一人ひとりに合った支援が可能になり、教科横断的な学びの充実にもつながると考えています」

同校では今後、地域や大学などとの連携を一層強化して持続可能な教育活動の実現を図っていく。

「学校だけに利点のある連携は、長続きしません。地域や大学などと連携する中で、本校の生徒に対する学校外の評価を把握し、本校が目指す生徒像が本当に社会から求められているのかを問い続けることが重要でしょう。そして、そうした視点を反映させた教育活動を行い、地域や社会にとつて真に有為な人材を送り出すことを目指していきます」（土屋校長）

\* 1 Regional Economy Society Analyzing Systemの略。産業構造や人口動態、人の流れなどの官民ビッグデータを集約し、可視化するシステム。地方創生の様々な取り組みを情報面から支援するために、経済産業省と内閣官房が提供している。 \* 2 ベネッセのアセスメントの1つで、問題発見・解決に必要な3つの思考力（批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力）を選択式、記述・論述式、質問紙で多面的に測るテスト。